

長期連載論文

最終回

# 文明の輪廻転生

—アトランティス異聞—

第七章 魔女と神話

その2

会長 渡辺豊和

## オシリスの苦難、夢通信 網の整備と荒廃

『死者の書』のオシリス神話はよく知られている神話とは違っている。悪神セトやオシリスの子ホルスの登場回数が少なく又出て来る場面も違っている。オシリスが死んだとき異教徒の旅人の助言をいれて首、胴、手脚、心臓の四つに切り刻まれて墓場に運ばれた。オシリスより先に死んでいた妹イシスは「私の心臓がない」という兄の悲痛な声を聞き駆け付け、ばらばらになった兄の死体を集め身体をもとどおりにした。しかし死体に入れてやったばかりの心臓を再び取り出して審判用の秤にかけるのは危険であり霊界創造の神トトの許しをえて心臓を計る審判なしで霊界に入ることが出来た。オシリスが死んだ頃には霊界はラアヤトトなど「光の神」たちの手で完全に平定

されるには至っていなかった。「闇の神」セトや悪魔セバウなどの闇の勢力との闘争が終わっていないかった。闇の勢力はトトの恩寵によって審判なしに霊界の一員となったオシリスの力が加わると光の勢力が更に強くなる恐れがありこれを阻止するにかなかった。悪魔に背後から襲われ再び殺されて死体をばらばらにさせられてしまった。心臓は悪魔セバウに食べられそうになったがトトが防いだ。ばらばらにさせられた首、心臓、胴、手脚はそれぞれ四本の木の幹の中に入れられ四本の木を東、西、南、北の地平線に柱としてたてる作業がセバウによってはじまった。これが終了してしまったらオシリスは永久に霊界に入ることが出来なくなってしまう。再びトトの助けによりイシスが四本の木の幹からばらばら死体を集め生き返らせた。地平線にしっかりと柱が建てられていない為に今回のことが起こると知ったトトはイシスとオシリスを結婚させホルスを生ませ、ホルスの四人の子にそれ

ぞれ四つの水平線を守らせた。ちなみにホルスは水平、「ホリゾン」の語源である。この後もオシリスの苦難は続く。彼は凶神セケルにだまされ死者の国に連れていかれ彼に死者の心臓を食べるよう強制された。もしそれをするとう汚物を喰ったということと直ちに死者の国に永久に閉じ込められてしまう。これはなんとか逃れ更に自力で死者の国を脱出することが出来た。ともあれオシリスは悪魔、凶神たちと壮絶な闘いを繰り返すのである。いくつもの苦難を乗り越えオシリスはトトなどの天にある神の神殿に入ることを許されやがては霊界の政治を取り仕切ることになる。このオシリス神話は未明の世界から絢爛華麗なアトランテイス文明の花を咲かせるまでのアトランテイス人の苦難を物語っているであろう。アトランテイス時代以前の未明状態はどんなものだったかはつきりわからない。人類の野蛮時代なのである。自分の生存に都合が悪かったら簡単に他人を殺害し飢えればそれ

を食べてしまうといったことだったのでろうか。いずれにしても狩猟採集段階だったのは間違いないだろう。アトランテイスの揺籃時代にも世界を一〇ヶ国に分割していたであろうか。ともあれ完成期のアトランテイス文明では地球結晶図にみられる形に世界は分割されていた。しかしこの見事な分割形態が容易く出来たとは思えないし又この形態の世界分割がうまく作動するためには夢通信網の整備が必要だったはずである。地球結晶の稜線上幅一〇〇キロに亘って稠密に夢通信網がはりめぐらされてはじめて世界全体に情報が均等に流れてアトランテイスの統治が完成する。オシリスの身体がばらばらにされたということは最初に世界は分割されたが各国の自己主張が強すぎて世界はまとまらなかったということであろう。アトランテイス文明の起ころはまず世界の分割からはじまったことを示している。それがイシスによって縫い合わされ生き返るとするのは夢通信網が各国の境界線上

幅一〇〇キロに亘ってはりめぐらされたことであろう。しかしこの夢通信網もアトランテイスの反対勢力によって破壊され機能しなくなつて世界は再びばらばらになる。こんなことが何度となく繰り返された。アトランテイスの反対勢力、即ち闇の勢力とは地球結晶図の一〇ヶ国から除外された北極と南極の両圏域に居住する民族のことである。得にユーラシアの北極圏の民族はBC二〇〇〇年以降勢力を盛りかえし夢通信民族即ち「光の勢力」をあっちこちで征服し駆逐してしまつたがそれと同じことがアトランテイス文明の黎明期に起きていたのに違いない。ばらばら死体を縫い合わせるのは各国境界線上に夢通信網をはりめぐらし光通信がまるで布の縫目そっくりに夜間走っていくのを地球外からは眺められたことを比喻としていつている。最終的には国境線だけでなく地球結晶の稜線上幅一〇〇キロに亘って限無く夢通信網がはりめぐらされアトランテイスの統治システムが完成

する。このことは『死者の書』でオシリスが死んだ時首と胴と心臓と手脚の四つの部分に死体が分解されたことにより知ることができる。即ちはじめに世界は骨格である一〇ヶ国一〇の正五角形に分割されてその境界線に夢通信網がはりめぐらされた。しかしエジプトの死体処理では各内臓がそれぞれとりだされて壺に入れられ保存された。又一般に流布しているオシリス神話でも死体が四個に分解されたことになっている。この一四個とは『死者の書』の霊界一四のアトに対応していることに留意してはほしい。要は分解の個数が増えているということは地球結晶の部分が下るにつれて一〇ヶ国の内部の稜線(正二〇面体の稜線)にも夢通信網がはりめぐらされたことを示している。オシリスはアトランテイス王であるが大王ではない。アトランテイス領域即ちプントを中心とした領域の王であつて世界の他の九国にはそれぞれ王がいた。

全体を統治したのはラア即ち大王である。神々は天上に居住したというのが天上とはこのプラント領域のことである。プラトンによる「アトランテイス市」であるが更に大王の宮殿、ここにはアトランテイスの創始王トトの神殿も含むがこれはアトランテイス市街地の中心にあった。オシリスの宮殿は大王宮殿を堀一つ隔てて取り巻いていた。いずれにしても『死者の書』の霊界はアトランテイス全体であり地球結晶図では南北の両極圏以外の一〇ヶ国全体をいう。但し夢通信が完璧にはりめぐらされ、夢通信情報が世界隈無く行き渡っていない限り世界全体がアトランテイスとはいえなくなってしまう。例えばある国と夢通信が出来なくなってしまうたらその国はアトランテイスではなくなくなってしまう。オシリスが闇の勢力にだまされ「死の国」に連れてこられたというのはこんな通信不能な国が出て来た場合を指している。又オシリスは死んだとき悲痛な声で「私の心臓がない」と叫びしたのはア

トランテイス文明の黎明期に最初につくられてあるべき日本の夢通信網が忘れられて未だつくられていず他の場所の整備よりも遅れてしまい夢通信がままならなかったときの混乱の様子を伝えている。オシリスの死体は心臓も含めて四個に分解されイシスによつて集められ生き返ったというからオシリスの悲痛な呻きからもやはり日本が最初につくられるべきだったことを示しているといえよう。ともあれ日本が世界の心臓だったのである。

## 霊界あちこち、 アトランテイス世界の 地理

さて霊界に新入りしたアニが最初に受けた訓練は霊界の言葉をおぼえ

ることだった。これを「口を与える儀式」というからミイラに入魂するだけではなく霊界の言葉習得でもあるのならこれはアトランテイス世界では夢通信の技術に通曉するために訓練することであろう。夢通信技術に通曉しない限り天上であるアトランテイス（プラント、スラウエシ）には行けないもし行けても一時たりとも生活できない。というより全世界との通信が出来ないからアトランテイス市民とはいえない。アトランテイス時代、夢通信技術の通曉者だけが世界一〇ヶ国のどこに住もうがアトランテイス市民であり、そうでない者は人間の形はしているが「死者」だった。このことをより理解する為にプラトンの「アトランテイス三凶形」を簡単に説明しておく。プラトンがそう説明しているのではなく私が前著『発光するアトランテイス』で提示した「プラトン三凶形」の読方である。アトランテイス世界は三重の入れ子になっていた。スラウエシ島にあった福島県とほぼ同じ

広さのアトランテイス平野。これは海没してしまった。このアトランテイス平野こそ『死者の書』でいう「平和の原」である。この平野南端にアトランテイス市があった。さらにアトランテイス平野（プラント、スラウエシの海没部分）を中心とし七重の同心円構成のアトランテイス領域があり北はフィリピン、南はジャワ島、南海上、東はニューギニア島西端、西はボルネオ島西海上とする領域である。アトランテイス領域とはスラウエシ島を中心にインドネシア諸島に囲まれた領域である。エジプトにもスーダンのハルツーム近傍（北緯一五度地）を中心に同大同形の七重同心円のエジプト領域がアトランテイスを陽領域とすれば陰領域として成立していた（図7-2）。更に世界一〇ヶ国がアトランテイス世界だった。アトランテイス市は外市に取り巻かれて中心市街があり中心市街は七重の同心円構成で堀（中心）陸、堀、陸、堀、陸、堀（外郭）となっている。このことはアトランテイス

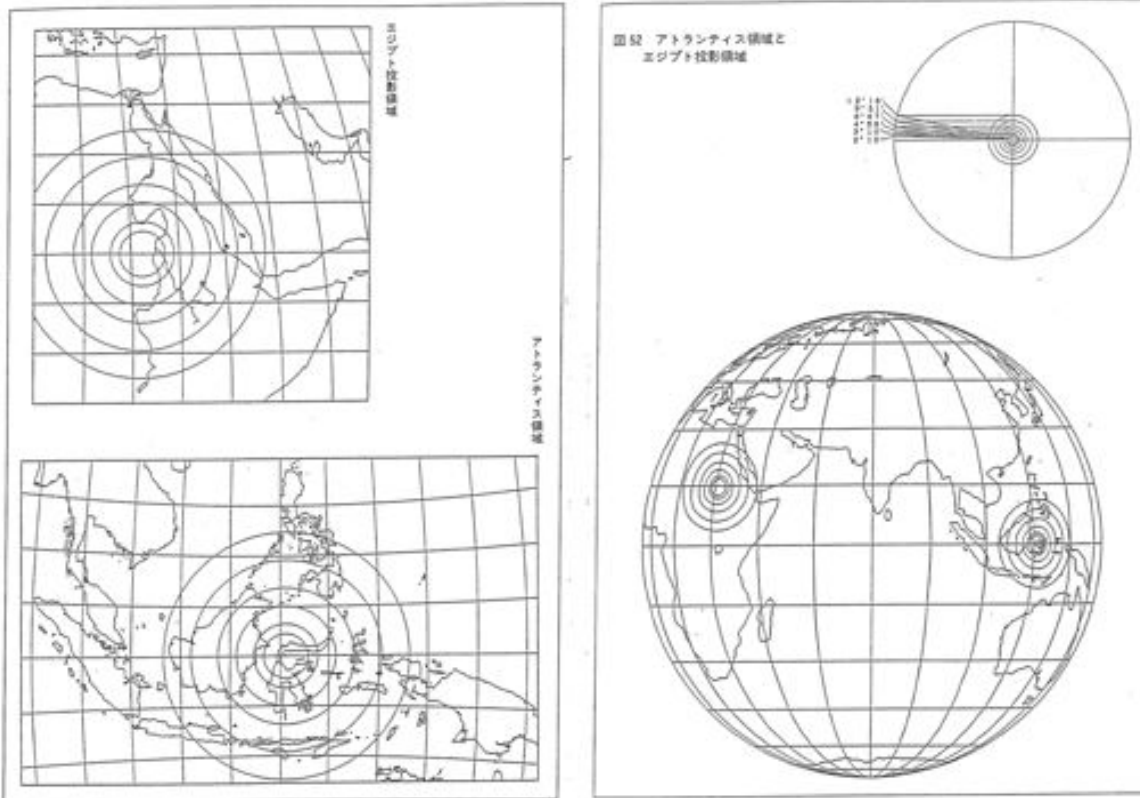


図7-2 アトランティス領域とエジプト投影領域

じ理由による。以上のことを知っておくと『死者の書』の霊界の複雑な構成がわかってくる。霊界には神々が住む天上、極楽があつてこれはアトランティス市をいうがすでに説明した。その詳細は後述に譲る。アニはたまには極楽に行つたこともあるといつてゐるから普段はアトランティス領域に住んでいた。霊界での生活には大麦、小麦畑に働きに行く霊のことについて書いてゐるし広大な農地についても記してゐるからこれはアトランティス平野、アトランティス領域全体のことである。広大無辺な霊界の構成はアアトが一四か一五あるというがこれはアトランティス一〇ヶ国にあたることも既に書いた。アニは中央からやや東よりのアアトに住んでいたからアトランティス領域の内、東北方例えばスラウェシ島東部あたりにいたとみてよさそうである。ここも実は光の勢力が霊界平定する前は「二重の山、二重に高く、ラアの光さえぎられ、大き

な蛇が常にとぐろを巻いて死者を屠殺する」場所だったが「今」は二重の高い山もなく平野となつていて「大きな蛇」もいない。南は外れにカル鳥の湖、北にはル鳥の運河があつたとアニはいう。これはプラトンが伝えたアトランティス構成にほぼ近い。但し南のカル鳥の湖とはアトランティス市南の海、北のル鳥の運河はアトランティス平野に東西基盤目状にはりめぐらされた運河をいう。ル鳥の運河を東から西に水上を滑走して楽しむ霊もいるのだから運河は北にあるとなつてゐるが東西にも走つてゐることがわかる。『死者の書』を読む限りではアトランティス世界は一〇ヶ国と更にアトランティス領域の計一ヶ国ありアトランティス領域は中心であり特殊領域の為プラトンは一〇ヶ国から除外すべきだつたのを一〇ヶ国のうちの一国として数えてしまつたと思われる。アニの住んだアアトの東北には比較的小さな「ハアマキのアアト」がありこのアアトの中心には天をつく断崖が立

っていた。これは地球結晶図では日本を含む①の正五角形であり断崖は富士山であろう。日本は①のほぼ中央に位置しこの正五角形には陸地が少ないから比較的小さいアアトといわれるのであろう。「高い山のアアト」というのもあり高い山の間は深い谷間であるから「谷間のアアト」ともいうがこれは②正五角形内のヒマラヤ山脈が高い山であろう。「セケル・レメのアアト」は河が多くセケル・レメとは太古ラアの舟を転覆させようとした怪魚(天魚)を退治した霊界の美人の名である。ここは地中海を挟む③の正五角形であり河とは地中海や黒海などをいうであろう。怪魚を退治した霊界の美人は海を泳ぎ渡る雄牛に乗ってそれを巧みに禦した女神エウロペのことなのか。「天を担ぐアアト」は霊界の東の端にありここからラアは「天」に昇る。これはオーストラリア東部も含む⑥の正五角形である。霊界の南端にあるのは「湖のアアト」でアフリカ大陸の南部を占める⑧の正五角形であり

このアアトの中央には極楽への通路「ヘテプの湖」があるというから「ヴイクトリア湖」のことをいうのではないか。ヴイクトリア湖は⑧の正五角形の中では北部にあるから中央ではないがかつては平和で美しい場所であったと聞く。「ヘテプの湖」の周辺には多くの湖があるとされているがヴイクトリア湖周辺にも大小様々な湖が多い。これ以上に地球結晶図の国と地理的に酷似しているのは「水の額のアアト」である。霊界最東端の「天を担ぐアアト」の近くにあるとされ「花の湖」の湖畔とされている。このアアトは湖と湖畔だけである。しかもほとんどの霊が行ったことがなく本当に霊界に存在するのかどうかもわからない一五番目のアアトである。地球結晶図のアアトリス世界では⑩であろう。ここは南米大陸の西、太平洋上でありごく一部だけが南米大陸、ペルーの海岸を含むだけである。「天を担ぐアアト」はアトランティス平野(プント、スラウエシ)から東に経度九〇度の

ところで太陽ラアが昇って来る場所として⑥であるから⑩はその更に東隣であり太陽ラアが昇って来る場所より更に東に位置する。というよりもアトランティス(プント、スラウエシ)からすればここは地球の裏側なのである。アトランティス世界でも人々が容易に立ち寄れるところではなかった。この正五角形の中央東にイースター島がある。

る。

(1) 対敵作戦や生活技術の修練。蛇、大蟻螂、蛆など凶霊、悪魂に対して首や心臓をとられないような防衛術。

(2) 特殊なきまりを知る。例えばオシリスの宮殿の塔門を通るにはそれ相応の心得があり霊界の礼儀、儀礼を知ること。

(3) クウを完全にする。靈魂をつつむクウ(霊体)を完全に保つ為の嗜みや教養を培うこと。

(4) 霊界の正義と眞理を体現するための修業。

以上四つのことをアトランティス世界の生活に置き換えたらどうなるか。

(1) 霊界には凶霊や悪魂がいて靈から首や心臓を奪おうと虎視眈々と狙っているということはアトランティス世界でもこの世界の秩序を破壊し

## 霊の生活の知恵 と修業、夢通信技術の修 得とアトランティス人 の生活信条

霊界に居住することを許されたア二ではあるがそこでより相応しい霊となるよう修業しなければならなかった。修業内容は以下のとおりであ

ようとする反対勢力の手先が相当数紛れ込んでいたということである。反対勢力とは「死の国」南北両極圏を司る勢力のことである。BC二〇〇〇年以降の後世ではアーリア民族などが代表的存在であり、これに心臓や首を奪われてはならずと注意するのは夢通信の微細な装置すらも破壊されないように警戒していることである。

(2)特殊なきまりとはアトランティス世界では夢通信に際しての礼儀のことであろう。霊界では違うアートの霊と交際するときの礼儀として自分の属するアートのよく知られた特徴を述べる。現世ならば日本人は富士山のある国の者ですというであろう。夢通信によって他の国の人と交信するときには日本なら富士山をもちだせばよいことになる。夢通信は光の点滅によって交信相手を夢の世界に誘うのである。地球全体としては半分が昼で半分が夜であり夢通信は太陽光を夜の世界に送り込むシステムであり明け方か夕方場所の人が

夜の場所の人に通信するのが常態である。発信者が太陽光を通したりさへぎったりして光の点滅をする。光のパルスによるモールス信号と思えばいい。これが最も基礎的夢通信の発信技術である。受信者は夢見の技術を必要とする。これまでも随時説明はしてきたがここでは夢見の技術の進化段階をまとめておく。

【A1】夢のつづきを好きな時に見れる。即ち夢見を自在に操作できる。【A2】次に自分の意志で幽体離脱ができて生きて霊界に行ける。アニは生きたまま霊界に行ったからこの段階から「アニのパピルス」ははじまっている。霊界では凶霊や悪魂に心臓をぬかれないために警戒していなければならぬのは幽体離脱して霊界を旅している時に凶霊や悪魂によって突如現世に戻されるとそのまま霊魂は自分の肉体に帰らず肉体はそのまま朽ちてしまい(死んでしまう)霊魂が行場を失う現象も指している。(これは幽体離脱の経験がないとわからない)【A4】クウ(霊

体)を完全にすると夢技術としては幽体離脱より更に進んだ段階でよいくいう生霊(いきりょう)のことである。そこにいないはずの人が目の前にあらわれるのが生霊現象である。日本では生霊は否定的に扱われている。痛烈な恨みを果たす時に生霊となつて相手に取り付き狂死させてしまう例がよく知られている。しかし古代エジプトや中世イスラム世界では前に述べたとおり聖人の使者として弟子がこの聖人に会いたいと思つた人の前に霊体(即ち生霊)としてあらわれている。アトランティス世界でも善良、高徳な生霊が最高の「夢状態」だったであろう。生霊とは現代物理学の概念でいえばスペースワープによって生じたある人物の瞬間の長大な距離の空間移動である。『死者の書』ではクウが修練によって黄金の神像そのままに光を放つと今まで見えなかつた極楽や神の国も見える。アトランティス世界ではアトランティス平野やアトランティス市に

世界何処からでも瞬時にやってきて

しかも克明に様々なことを見ること  
が出来るということである。しかし  
一般のアトランティス人はここまで  
は出来ず直接「平野」や「市」のあ  
るプント(スラウエシ)にやって来  
た。実は【A4】霊体の自在な空間  
移動即ち生霊現象を体現出来るス  
ースワープ。夢進化の最高段階【A  
5】過去から現在、現在から未来へ  
の時間の流れを逆にする未来から現  
在、現在から過去に戻すことも出来  
るタイムスリップ即ち時間の自在な  
移動。更に物質の出現消滅を自在に  
操作する能力【A3】がある。即ち  
物質の自在な点滅。この能力で手の  
掌に突然観音像を生じさせたりでき  
る。『死者の書』では霊界には「昨日  
は今日であり、今日は昨日であつて  
今日は明日、明日は今日である」と  
いう言葉があり霊は時計の針を自在  
に戻したり進めたりすることが出来  
ることになっている。これは、「原始  
初生の技術」といわれる生活技術な  
のだ。こんな特異な技術をエジプト  
では魔術と呼ぶが、これを身につけ

た人が妄りにタイムワープやスペースワープをやつてはアトランティス世界といえども大混乱に陥つてしまふ。そこで特別の時には東に行くなとかいった禁忌、タブー（ある特別の状態の時には東にスペースワープするなどといったこと）や細々とした生活上の掟、アトランティス世界では夢通信上の決まりごとを守らなければならなかった。

## 極楽と神の国、ア

### トランティス世界の構

#### 造

ことのついでに古代エジプト魔術の技倆段階についてふれておく。技倆の段階に関する解説を直接目にし

たことはないが魔術の内容をみると安倍晴明で有名な日本の陰陽師の秘術とほとんど変わらない。というこゝとで陰陽師の技倆段階によつてエジプトのものを類推してもほとんど間違ひあるまい。陰陽師の初歩はまず一般の人々には見えない鬼（凶霊、悪魂）の姿を見ること【B1】見鬼の術。陰陽師は鬼を蛇や蛙、鳥などに化けさせて敵を攻撃、時には死にいたらしめる。又日常生活で普通の人々には見えない鬼を奴婢として使役した。鬼に戸を開けさせたら普通の人々には自然に戸が開いたかに見えた。そうして陰陽師が使う鬼を式神といいこの【B2】式神を自在に使役する能力。エジプトの魔術師も動物神を使い敵を攻撃したことも含めて【B3】直接手を下さずに呪文を唱え呪殺する能力。勿論エジプトの魔術師もこれを重んじた。雲を呼び嵐にさせ海賊を船酔させて盗難財宝をたつた一人で取り返し海賊を捕縛した智徳は安倍晴明と同時代の陰陽師であるがこんな【B4】天然自

然の天候や海水を自在に操作する能力。モーゼが海水を二つに引き分けて海上に陸の道をつくつた術もエジプトの魔術である。【B5】死者の蘇生。この魔術の技倆向上段階と夢見の進化過程とはほぼ一致する。【B1】の見鬼の能力は【A1】夢見の操作、【B2】式神の使役は【A2】幽体離脱、【B3】呪殺に【A3】物質点滅【B4】の天然自然の操作は【A4】のスペースワープ、【B5】の死者の蘇生と【A5】タイムスリップは対応している。ということは魔術は夢見の進化と不離不即の關係にあり夢見は個人的な行為であるのに対して魔術は他人に影響を与える社会性のある行為ということにつきる。以上のことを念頭に入れて『死者の書』を読むと霊界の構造がよくわかつてくる。ということはアトランティス世界の構造も明確になってくる。霊界では極楽を「平和の野」と呼ぶからアトランティス世界ではアトランティス平野が極楽に相当していることがわかる。ところがこの

極楽の更に上部に神の国がある。アニは極楽には数回行ったが神の国には行ったことはない。この神の国がアトランティス世界ではアトランティス市であるからやはりアニはアトランティス市の外市に住んでいたのではなく未だアトランティス領域に留まっていたのであろう。『死者の書』にはアニが極楽にはじめて行ったときのことか語られている。アニは自分のアアトにいて畑の端に腰をおろしてあたりの風景を見ていたところ急に体が浮上して空中に舞い上がった。夢かと思つたが現実であつて眼下には沢山の湖水が見えていた。彼はヘテプの湖から極楽に登つたのだ。というのもここが極楽への登り口だったのである。極楽に着いた時は半透明のカーテンに遮られているに似てよく景色が見えなかったがあらかじめ教わつていた極楽に入る時の作法を思い出してその通りすると半透明のカーテンは消え、辺りの景色ははっきりと見えてきた。これは幽体離脱して天上に登り霊界に入つ

たばかりの時とほぼ同じ体験過程である。ということはアニは極楽に登るにも霊体から更に霊を離脱させたのであろうか。極楽に行く為には霊を更に純化しなければならないということか。アニはまず九天井の寺院らしい建物に入っていた。彼は自分の意志とは関係なく建物の中に入らされた。建物の中には極楽を守る三つの神像があった。これに敬礼してから外に出ると眼前には大河が流れていた。そこには父のミイラの姿が見え、すぐ消えてしまった。しかしそれは幻影ではない。そしてアニはいつのまにか美しい湖の岸に立っていた。湖岸をまわると麦畑の刈り入れしているのが見え、働く人々は微笑みあい隅々まで平和に満ち溢れていた。まさに「極楽」なのであった。但し極楽とは現世とまるで変わることはなかった。現世にあるものはすべて揃っていて碁将棋もあり男女の霊が恋愛するのも普通だった。次に神の国である。神の国には強風に吹き上げられるままに登って行く。

その為危険も多い。ここに登るには東西南北の四つの「風の入口」がある。神の国はオシリスの宮殿がある地区と「靈魂の社殿」地区、ケルチ地区と三つに分けられる。「霊界の社殿」はオシリス以外の神々の住居地区。ケルチは下界での神々の休憩所（というより役所）がある霊界の庶民の国であり神々はその庶民の監督官である。ここには監督官一六神の住居（官舎）もあるのはいうまでもない。オシリスの宮殿には審判廷もあるのだがここは霊界最高位の場所である。この宮殿には二〇の塔門がありここを通過するにはそれぞれの塔門通過の問答に合格しなければならぬ。当然ではあるがこの宮殿は威容を誇り大小様々な数々の部屋がある。アニも「審判部屋」に霊界にきたばかりの時に入ったというが、そうすると霊界に入る資格審査以前に神の国に来ていたことになり、どうも辻褄があわない。やはりアニは最初霊界の入口の「審判所」で代官によって入界審査を受けたのだ。

オシリス宮殿での審判所はオシリスと会うことが出来るかどうかを審査する場所であろう。アニはオシリスに面会する荣誉には浴したことがないからまだこの審判所で審査を受けるまでに至っていないのであろう。以上の記事からアトランティス世界を読むとどうなるのか。アトランティス世界の構成は【C1】一〇ヶ国にわかれたアトランティス世界、【C2】アトランティス領域(図7-2)、【C3】アトランティス平野【C4】アトランティス外市、【C5】アトランティス中心市街であるが極楽が【C3】のアトランティス平野なら【C4】のアトランティス外市は神の国の神々の居住地。【C5】全体がオシリス宮殿ということになる。ケルチ即ち霊界の庶民の居住区はアトランティス領域ということになる。アニはアトランティス外市に住んでいたのではなかった。アトランティス領域の住人だったというわけである。しかしプラトンのアトランティス三図形はそれぞれそのまま世界全

体を(即ち地球)の構成をも示している世界は三重の入れ子構造となっていることを暗示していた。この世界の入れ子構造に関しては『死者の書』でもふれていて霊界の一〇ヶ余りのアアトは神の国の区分「アアトリト」になぞってつくられたとある。アニが極楽に行く為に登った所がヘテプの湖とすればここはアトランティス世界では⑧の正五角形の中のアフリカ中東部になるからアニは再びアフリカに戻ったのであろうか。ところがそうではあるまい。彼にとつては今やアトランティス領域(三図形ではアトランティス市を地球としてアトランティス市街地)が全世界であるからここでの南端はバリ島でありヘテプの湖はバリ島のキンタマニ―山麓の小さな湖のことであろう。しかしアトランティス世界の入れ子構造はもう少し複雑である。ラアが東から中天までアアト舟、中天から西までアアト舟に乗るといったが霊の中にはこれに同乗を許される者もたまにいる。これはオシリスに面



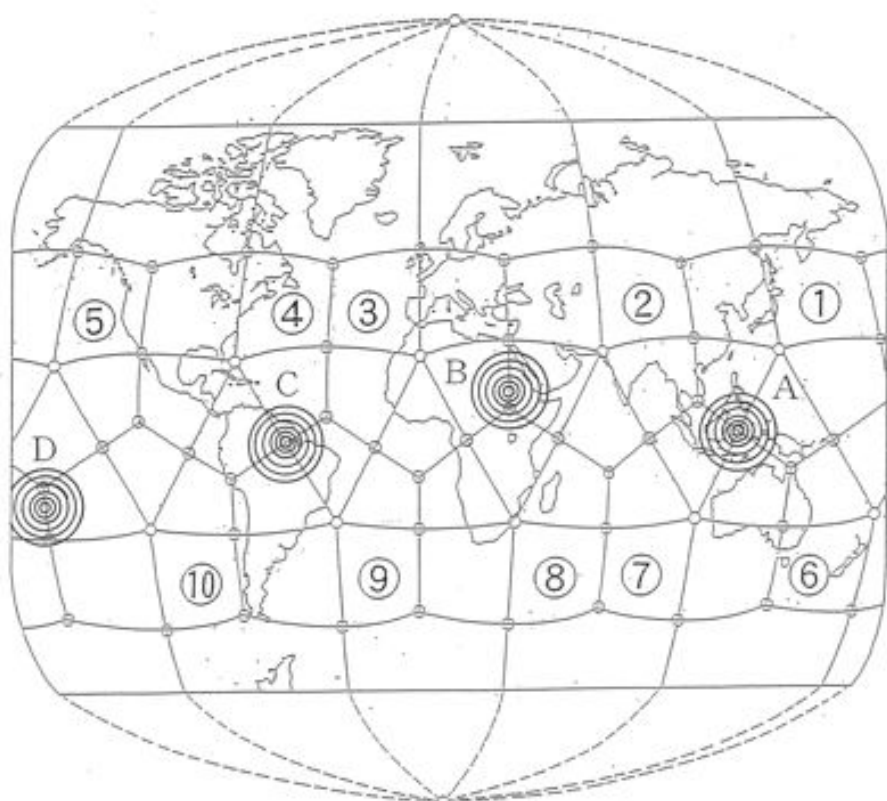
会する以上のまさに最高の荣誉である。この舟に乗ると極楽や神の国も含め霊界全体が下界となつてみえる。この最高荣誉にあずかるのは勿論アトランティス世界をラア大王と共に巡行横断出来ることではあるがこれにも比喩が隠されている。アトランティス領域からアトランティス平野（プント、スラウエシ）まで来てアトランティス中心市街地に入るのに外市を二分する運河を舟で渡るのが荣誉であり一般の霊は徒歩で入る。この場合中天は中心市街地のことになり東は外市の東（プラトンは北とする）であるがここからアアテト舟の模倣舟で中心市街地の「オシリス宮殿」に入り出ていく時はアント舟の模倣舟で西に向かう。いずれにしても『死者の書』はアトランティス世界の解説書でもあったことがよくわかってもらえたのではあるまいか。プラトンのアトランティス伝説がエジプトの神官から聞いたことであつたからエジプトにもアトランティス説話があつてしかるべきであ

る。それが『死者の書』だつた。アトランティス世界は一〇ヶ国であるが霊界には一四か一五のアアトがあるという。地球結晶図ではプントのあるスラウエシは①と⑦の正五角形の境界線上にありエジプト、ギザも②と③の境界線上にある。地球結晶図は間違いなくアトランティス世界を示しているからアトランティス領域とエジプト領域は一〇ヶ国とは別に国として存在していたとみなしていいのではないか。更にプント、スラウエシの地球の裏の点である南米ブラジル北部（北緯〇度、西経五八度五二分）とエジプト、ハルツーム近傍点の地球の裏である南太平洋上の点（南緯一五度、西経一四八度五二分）にもアトランティスやエジプトと同形同大の円形領域があつて、国となつていたとするとアトランティス世界の国は都合一四となる（図7-3）。これに未知の国「水の額のアアト」に相当する地域があつたのである。それは⑩の正五角形の中心の何処かなのであろう。

## 地球医療 と夢通信

『死者の書』の中のアトランティス世界の構造についても一つ重要なことがある。『死者の書』でも霊界を東西南北に入口や門があると繰り返し書かれているが『死者の書』の著者バツジの別の著書『古代エジプトの魔術』（石上玄一郎・他

アトランティス10国  
①~⑩  
A アトランティス領域  
B エジプト領域  
C アトランティス裏領域  
D エジプト裏領域



訳 平河出版社）でエジプトでは地球を四半分ずつに分割して東西南北の基本方位を示したとある。それは

世界を東西南北の四領域に分割して認識していたことである。ギザのピラミッドも正確に四面は東西南北を向いてつくられているから地球ならばプント、スラウエシを中心に東西南北に分割して認識していたことになる。但し大西洋側は地球の裏側であるから東西南北の四領域にそれぞれ入る部分（地球結晶図では③④⑨⑩）はプント領域にいたアニにとつては縁のうすい国々だったということになる。例えば霊界の南はずれにある「湖のアート」が世界結晶図の⑧の正五角形の中にあるとしたのはプント、スラウエシを中心に東西南北をピラミッドに似せて対角線状に太平洋側の世界を四分すると⑧東南部分が南部の端となるからである。霊界最東端とはアトランティス世界では⑨と⑩の正五角形の赤道寄りの部分となるがこれはプント、スラウエシからすれば地球の裏側でありここから太陽が登るということにはならないはずである。プント、スラウエシから東に九〇度の経線が走る

⑥と⑩の境界線を東端としたであろう。東端の「天を担ぐアート」が⑥ならばその近くにあり、しかも滅多に行くことの出来ない「水の額のアート」が⑩なのではないかとしたのもここがプント、スラウエシからは地球の裏側であるからである。『死者の書』では霊界にも現世同様に昼と夜があり太陽（ラア）が東天から登り西天に没する。霊界の夜は「光をもって夜の時間を数える」といわれている。このことは謎だと今村光一はいうが日の出と日没の太陽光を活用した夢通信のアトランティス世界の夜のことを知ったら『死者の書』のこの言葉の意味はよく理解できるであろう。この夢通信網は地球医療の装置であるといったがそれでは『死者の書』に地球医療の実体が記述されているであろうか。霊界が平和である時はアトランティス世界の「地球」も健康であるということである。『死者の書』では霊界の平和を乱すのは悪神セトの勢力が大暴れる時である。この勢力が大暴れる

時には雷を空に放つ。雷鳴が轟き暴風雨が荒れ狂い洪水が襲い、霊界といえども凶作となり末期的症状を呈す。また大旱魃も霊界の大凶変であるからこれもアトランティス世界の大病であった。このことからアトランティス世界でも天災が最大の病気であるとされていたことがわかる。これをどうして癒すかは後述するとして『死者の書』でも内臓にはそれが受け持つ方位があり胃と大腸が南、小腸が北、肺と心臓が東、肝臓と胆のうが西である。各内臓の方位に違いはあるがこれは中国の漢方医学の分類法と酷似している。この内臓方位もエジプトが中心であるからアトランティス中心の方位で出来た地球結晶図のものとは違ってくるのは当然である。しかし大腸と肝を西と南に相互入れ換えしてしまえばアトランティスの場合の方向認識と同じになる。このことからアトランティス世界では地球が人体に見立てられ内臓が地球即ち世界の各地域にはめこまれていたことが確実であ

りそれがエジプトで伝承されてきたことがわかる。アトランティス世界では夢通信網が機能を果しえなくなることをもつとも恐れたから多数の技術者即ち魔術師を世界に派遣した。『死者の書』では霊がオシリスの宮殿に入って行くには多数の塔門や門があつてそれぞれの門を二神が守ったから全体では驚くべき多数の守衛の神々がいたとある。しかも霊はその神々の名を言い挨拶しなければならなかった。アトランティス世界にとつて多数の門とは夢通信装置であるピラミッドや環状列石であり、それを守る神々とは夢通信技術者、魔術師であることはもはやわざわざ説明するまでもあるまい。魔術師は夢見の専門家でもあるが【A4】のタイムスリップまで出来る魔術師は【B4】天候、海水の高低など天然自然をも自在に操作する。地球の病気は天災であるからこれを予防出来るにこしたことはない。最高度の技術の魔術師はそれが出来た。又世界の何処にどんな天災が起こるかも予

知した。このことを全世界に夢通信するのである。そうすれば天災の被害は最小限にいとめられる。これが地球医療の基本構図であった。それでも天災はあつちこつちで起きた。最高魔術師ですら阻止出来ない天災は天即ち宇宙の意志でありこれはもはや致し方ない。それでも魔術師は天災後の被災地の復旧に世界の知恵を結集せよとばかりに方々の仲間と夢通信しあつた。そして彼らの指示にそつて人々は復旧に全力を尽くした。さて夢見の進化過程Aと魔術の技術段階Bとは対応するといつたがこのA、Bがアトランティス世界の構成Cとは関係ないであろうか。実は大いにそれはあつた。魔術の技術段階に応じて魔術師にもランクがありそれを仮に【B1】～【B5】をそのまま使用するとアトランティス世界の住民自体相当の霊能力、魔術能力の所有者であるから【B1】見鬼以上の技術者であるのはいうまでもない。要するにアトランティス世界【C1】は【B1】(【A1】夢の

自在操作)と対応する。次に【C2】アトランティス領域には【B2】鬼神の使役能力者(【A2】幽体離脱)、【C3】アトランティス平野には【B3】呪殺能力者(【A3】物質点滅)、【C4】アトランティス外市には【B4】天然自然の操作能力者(【A4】スペーススワープ)、【C5】アトランティス中心市街地には【B5】死者の蘇生能力者(【A5】タイムスリッ プ)がそれぞれ居住していた。アニは【A2】幽体離脱の霊であるから【B2】鬼神を使役する能力までは身につけていた。このことからしても彼の居住地はやはりアトランティス領域だったとみなさなければなるまい。ところが全世界がアトランティス世界であつたわけではなく夢通信網が行き届いていない地域は領域外であり『死者の書』では地下、闇、凶霊世界とされている。しかしこの世界の人々全てが凶霊即ち無明の野蛮人ではなかつた。アトランティス世界から強引に拉致され逃げるに逃げられずこの世界に閉じ込められて

いる人々も大勢いた。この人々は無明の勢力『死者の書』ではセトなどの凶霊、悪魂の勢力)に夢通信網を破壊され自分達の居住地を無明の地とされ暗黒の闇の中に拉致されたのだった。しかしアトランティス勢力が破壊された夢通信網を修復すると闇に再び光が走りこれが無明の地のすぐ近くまで届く。この時拉致され閉じ込められた人々は「光だ。」「光だ。」と口々に叫び無明界から一斉に飛び出して来る。こうして無明界の混乱がはじまる。勿論こんなことが起こるのはアトランティス世界との境界線近くである。こうして囚われのアトランティス人の多くは無明界から脱出する。復旧した夢通信網を保守活用する人々が帰還したのだからアトランティス世界は平穩に戻り地球医療上の健康を取り戻すことになる。『死者の書』には地上の霊界から地下の国への三つの落穴アテメントの入江、墓の谷、断頭台のうち墓の谷でラアの光がかすかにもれてくと「光だ。」「光だ。」と口々に叫び

群がって暗い洞窟に犇めいている大勢の凶霊たちが洞窟の入口に向かつて津波さながらに殺到する場面が描かれている。光を求める凶霊は審判によつて心臓を抜き取られた霊ではなくもともと霊界にいたのに霊界と凶霊の国との戦争の時、不注意で落穴に落ち込みそこで凶神セトに捕らえられた霊魂であつた。彼らは光と闇の戦争の犠牲者だった。

## エジプトの夢通信

古代エジプトはアトランティス文明をそのまま引継いだから夢通信も盛んに行われた。『死者の書』の著者バツジは別の著書『エジプトの魔術』でエジプトの文書に表われる夢に関する話をいくつか紹介している。

一つはBC一四五〇年頃のトトメス四世である。トトメス四世が未だ王子であった頃スフィンクスの紋章の近くで狩りをしていてその陰に腰を下ろして休んでいるうちに眠り込み夢を見た。夢に神があらわれ自分はスフィンクスであるが自分の像が砂に埋まっている。砂を取り除いてくれたら南と北の国、即ち全エジプトの主権を与えようといった。トトメスは岡状に盛り上がっていた砂を取り除くとスフィンクスの像が表われ後に彼は全エジプトの王となった。このことはスフィンクスのそばに立つ碑に書き込まれていて現存する。トトメスは父アメノフィス二世の長子ではなく王位継承順位も低く普通ならば王になれないはずだったのに幸運にも王となった。その王になれた理由は不明だといわれている。

BC六六〇年代古代エジプトも末期に近づくとも混乱しエチオピアからやって来て全エジプトを征服し王となったヌトアメン王のことである。彼は未だ全エジプトを征服する前、エチオピアにいた時の治政第一年に夜二匹の蛇の夢を見た。一匹は右手にもう一匹は左手に。目をさますと蛇はいなくなっていた。夢判断によるとこう告げられた。「南の地は汝のもの。汝は北の統治権も得るのである。白い冠と赤い冠で汝の頭を飾りなさい。この地は全て汝に与えられるであろう。」二匹の蛇とは南と北の女あるじ女神ネケベとウアジェトの象徴だったのである。

エジプトでは眠っている人に未来が啓示される夢が非常に望まれた。そこでエジプトの魔術師は魔法の絵を書いたり言葉を誦えたりいろいろ工夫してそんな夢を顧客のために獲得できるように頑張った。幻や夢を獲得するための呪文もあった。これこそ魔術師が一般の人々に夢を送るのである。それを引用する。但し古文調の訳語を現代調に直している。

ペス「神」から幻を得るには次のとおりベザの絵を汝の左手に描きなさい。イシス(?)に献ずる細長い黒い布で手をつつみ横たわらせて眠り問いかけられても一言も話してはいけない。布の残りを首に巻きなさい。汝が書く黒インクは「牡牛の血、白鳩の血、新鮮な(?)乳香、没薬、黒い書用インクは硫化水銀、桑の汁、雨水、にがよもぎと、やはらずえんどうの汁」からできたものでなければならぬ。これで汝の願いを沈む太陽の前で次のとおり書くべきである。と夢見の準備を説明してから夢を今夜こそ与えよといった意味の呪文となえる。

夢を得るには清潔な麻布の袋をとってこの上に次の名を書きなさい。それをたたんでランプの燈心とし、火をともしてそれに混じりけのない油を注ぎなさい。袋に書くべき呪文は次のとおりであるとして五柱の神の名があげられている。夜床につく時は食物に触れてはいけないし、全ての汚れを断つてから次のことをなさい。ランプに近づき次にあげる呪文を七回くりかえしなさい。そうし

てから灯を消し横たわって眠りなさい。呪文は「(前略)雷のエアオン、あなたは蛇のみ月をからし、日輪の玉をその霜枯どきに揚げられる。(後略)」

夢を得るための呪文であるからやはり脈略がないのは当然といえれば当然であろう。ともあれ古代エジプトでは魔術師が夢通信の技術者だったことがこのことからわかってもらえたであろう。当然アトランティス文明はこんな夢文明であった。

とはいってもプラトンは『クリテイアス』で夢のことを語ってはいない。むしろ物質的に富んだ文明であり火そっくりに輝く「オレイカルコス」という合金のことが書かれている。運河を縦横無尽にはりめぐらせたり、陸地をくぐるトンネルをつくって中心市街地の環状運河を繋ぐ高度な土木技術などからむしろ高度な物質文明を誇った様子が強調されているし、各国には一万の戦車をもつ

ほどの軍力を備えていたというから夢文明とは遠いと思える。ところが物質文化が栄え過ぎ戦争をひき起こしたから海神ポセイドンに激怒され一夜にして海に沈められてしまった。本来は平和で徳の高い文明であったとプラトンも言明しているしアトランティス文明はやはり夢文明であったのだ。

さてエジプトには夢判断で有名な話がある。『旧約聖書』に書かれたことである。若いユダヤ人のヨセフが食を求めてエジプトに働きに来ていた。ある日エジプト王が夢を見た。ナイル川から七頭の肥えた雄牛が上がってきたがそのあとからやせ細った雄牛が七頭上がって来て肥えた牛を全て食べてしまった。それでもやせ細った牛はもとのままやせ細っていた。そこで目をさました。それから又もう一つの夢を見た。一本の茎によく実った七つの穂がでてきた。そのあとから東風にやけたしなびた七つの穂がでてきて良く実った七つの穂のみこんでしまった。そこで

目がさめた。王は全国の知名の魔術師達を呼んで夢判断させたが満足な答えをする者が一人もいなかった。

そこでヨセフが呼ばれて夢判断をさせられた。ヨセフはそれは七年の豊作の後に七年の飢饉がくるということですからすぐにもその準備をしておくべきですと警告した。ヨセフの夢判断どおり七年の豊作の後七年の飢饉がやってきたが豊作の間に食糧を貯えていたので七年の飢饉の間、死者をだすこともなく無事に過ごせたのであった。王は喜びヨセフを外国人であるにもかかわらず宰相に登用した。これもエジプトでは夢がどれだけ重視されたかのエピソードである。□

## アトランティスからの転生

アトランティス一〇国が五つにグ

ループわけされ二国が一对となつて白などの一つの色、金などの一つの物質（原素）を目印としていた。というより色、物質別に分担していた。ケイシーはアトランティス人は赤人だったというがこれもアトランティス領域の人々は赤を目印とされていたというのである。日本を含む東アジア領域も赤であったからその領域と一部重なるアトランティス領域も赤だったのはケイシーのリーディングが私の読取りと合致している。

BC四〇〇〇年からBC二七〇〇年の間に世界全体で「アトランティス」の転生が次々に起こりエジプトで完璧に完成するのだが、二国一对のグループの痕跡も洪水伝説によって確かめられた。アトランティスの海没は文明の崩壊、即ち「死」でもあった。海没は洪水伝説として後世に伝えられたが一对の国ごとに酷似した洪水伝説を今も伝承しているのは注目すべきである。この一对が将来起こる「アトランティス」の転生の時、また対をなすべきとの啓示か

もしれない。BC五〇〇〇年～BC四〇〇〇年のものであるとされる「アニのパピルス」は前世がアトランティス時代のエジプト人アニがその前世であるアトランティス時代のエジプト人としてアトランティスに移住した記憶であろうか。それともBC一五〇〇年頃の成立ともいわれるのはアニはやはりその頃の人でBC五〇〇〇年～BC四〇〇〇年に生存したエジプト人が転生していたのだろうか。そうならば「アニのパピルス」はアニに生まれ変わった前世の人物の更に前世の記憶という事になる。ともあれエジプト文明はアトランティス文明の完全な転生であったから「アニのパピルス」などの完璧なアトランティス物語も成立出来たに違いない。転生は一人だけ孤独に行われるばかりではなさそうである。時と場合によっては現世で集団だった人々は全員一抛に転生する事もありうるらしい。但しその場合、精々数年の間にある決った場所に多数の妊婦を必要としその多数の妊婦

がそれぞれ生まれ変わりを生む事になる。文明の転生は数代に亘って集団が転生する必要があるに違いない。この集団の転生をうながすが神なのではないか。人間が地球の遺伝子ならば神は遺伝情報として地球外からもたらされる。モーゼやキリスト、マホメットなど卓越した予言者はアトランティス文明を転生させる為に神がこの世に遣わした使節だったかもしれない。モーゼの後にイスラエル、キリストの後にローマ、マホメットの後にサラセンと高度な文化国家が出現し繁栄した。これらの国々しかしこれらの国々よりもインドの釈迦の後に出現したアショカ王のインド、マウリア王朝の方がよりアトランティスの色彩の濃い転生だった。ともあれBC一三世紀のモーゼ、BC五世紀の釈迦、一世紀のキリスト、七世紀のマホメッドまでは神々はアトランティスの転生をアトランティス霊魂に要請し実現させていた。この後アトランティス霊魂はチベット

に集まりここで転生する事を望んだらしい。これも地球外情報としての神々の意志であろう。チベットのラマ教が中国の圧迫によって衰退している今日アトランティス霊魂は何処に転生の場所を選ぶのであるうか。利己的遺伝子人間の利己主義も極限まで膨張してしまった。こうなつては神々はアトランティスの転生をあきらめ霊魂を別の星に誘導し人類とは違った形で宇宙の一角に「文明」を顕現させるのであろうか。更にもう一つ付け加えておく。ホピの祭で現在も行われているものの中に地球全体と人間は同じ構成となつていてそれぞれ七つの世界を有している事を示す儀式があるという。これはインドの身体宇宙には七つの世界（チヤクラ）があるのと全く同じである。マヤはホピと同族の文明であるからここにインドからやつて来た一団があつてそれがホピにまでインドの人体図式を伝えていた事を示してはいまいか。

## 「聖書」の予言

アトランティスの夢通信網はアトランティスが海没してからでも何度か修復された。これが充分機能している間は世界は天災からのがれ人々は幸福を享受できた。しかしハトシエプスト女王時代の大修築が最後、これ以降は次第に老朽化しいつしかその存在は忘れられていった。アトランティス文明隆盛時代こそ人類は楽園にあつたが海没したからといって人類はそのまま楽園を失つてしまつたわけではない。夢通信網の修築ごとに楽園は蘇つた。ところがアトランティス時代は勿論のこと、BC一三〇〇年代初頭のハトシエプスト女王の時代ですらこの楽園から阻害されている民族が

あつた。何せエジプトでは奴婢として酷使されていたから当然ではあるがそれはイスラエルの民、すなわち祖国を失つたユダヤ人である。

彼らはその恨みを「聖書」にぶつけ予言の形でそれを晴そうとした。

「聖書」ではイスラエルの民は将来も他民族の迫害を受け続け何千年かのちには最終戦争（ハルマゲドン）が起りイスラエルは見るも無惨に破壊しつくされ人々も三分の二は死んでしまう。もはや全滅かと思われたとき天からメシアがやつてきて敵を徹底的に撃破し残つた民を救う。

ここに残つたものこそ神が選んだ民である。終末戦争とメシアの来臨を予言したものとしてはBC五〇〇年頃のエゼキエルとダニエルがいる。二人ともイスラエルの北と東から敵がやつてくるといつている。とくにエゼキエルは明確に戦争の様相を予言している。敵はロシア、さらにペルシアなどの東の国々。戦争には四枚の翼と四本の車輪つき足がある金属のピカピカ光る怪鳥が大活躍す

るといつている。ヘリコプターを思  
わせるがとにかく空中からイスラエ  
ルを核兵器か細菌爆弾で攻撃してき  
て大地は炸裂し、太陽は天を覆う粉  
塵で隠れ昼でも闇と化す。まるで現  
代の科学兵器による戦争、というよ  
りもそれ以上に技術進化した核と細  
菌による戦争模様を克明に描写して  
いる。まるで眼前にしているときか  
思えない迫真性がある。

ダニエルは終末戦争の時期を明示  
してそれを聖書学の知識で計算  
すると一九九九年七月頃となるらし  
い。

これがノストラダムスの世界終末  
予言の根拠だったわけである。

BC二〇〇年頃はゼカリヤがいて  
イスラエルに再び建国したとき世界  
の終末がやってくるとしている。と  
いうことは一九四八年にイスラエル  
建国があったから二〇世紀後半であ  
りダニエルの予言とも重なる。

ここでも無残な戦争の様相が描写  
されている。次がキリストである。  
最終戦争のとき自分は天から再臨し、

神に選ばれた少数のものを救うと明  
言している。

最後はAD九〇年頃の人、ヨハネ。  
彼はユーフラティス川のほとりにつ  
ながれていた四人の天使が人間の三  
分の一を殺すためにとき放たれ最終  
戦がはじまり、大破局がやってくる。  
これは避けられないのである。

五人の予言者は最終戦で人類は破  
局に面するといいい戦争の惨状を核戦  
争さながらに描写している。勿論空  
中からの攻撃もいかにもさもありな  
んとばかりの現実性がある。まるで  
実際に見ているようである。興味が  
あつたら旧約、新約をじかに読んで  
ほしい。旧約の三人はそれぞれの名  
前の「書」となっているしキリスト  
はルカとマタイ福音書、ヨハネは黙  
示録である。

五人に共通するのは神を信じる選  
民のみが救われればいいのであつて  
それ以外の大多数九九パーセントの  
人類は滅亡しても構わないとしてい  
ることである。彼らにはすさまじい  
怨念が渦巻いている。余程楽園から

疎外されたのがくやしかったのに違  
いない。

このことを証明する古文書がエジ  
プトで一九四五年に発見されている。

## 何故予言は成就されな かったか

ナグ・ハマデイ写本といいいエジプ  
ト、カイロ近郊の洞窟からみつかつ  
た初期キリスト教文書で四世紀初頭  
までのものとされる。これにアダム  
とイヴが蛇にだまされるエデンの園  
のことがでてくるが話は逆になつて  
いる。蛇にだまされ禁断の木の実を  
食べたから人類は死すべき存在にな

り楽園を追放されてしまうのが旧約  
聖書である。ところがこの写本では  
蛇にすすめられて木の実を食べたら  
不死の存在となり宇宙の原理森羅万  
象のことわりを悟る。これに嫉妬し  
た神が楽園から二人を追放してしま  
うというのである。

楽園の木の実は夢通信の技術の習  
得だったはずである。人間は光を獲  
得しつづあつたといっているからだ。  
蛇はアトランティスの王、蛇を王冠  
に飾るオシリスに違いない。

ところがイスラエルの民の神ヤハ  
ウエは嫉妬し楽園から人類を追放し  
たつもりが追放されたのはイスラエ  
ルの民のみであつたというわけであ  
る。

ヤハウエは嫉妬する暗黒世界の支  
配者であつた。それでも夢通信網が  
充分機能を果たしている間は支配で  
きた人々は亡国の民イスラエル人だ  
けでありBC一三〇〇年代まではそ  
の支配領域は増えはしなかつた。そ  
れで神は選民以外の人類滅亡の緻密  
な計画を立てた。旧約聖書にはその

計画にそって着々と事を進行させているモーゼをはじめとするイスラエルの民の姿が描かれている。また終末とメシアの来臨の様子までも代々の予言者のコトバとして描いている。

A D一五〇〇年代半ばの人ノストラダムスはこんな伝統的ユダヤ人の予言者の最後の人物であつたらしい。

しかし彼の予言は成就しなかつた。ところが一九九九年七月人類破局はなかつたがそれ以外の予言はことごとく当たっていることである。フランス革命は詳細までもさらにナポレオンもヒットラーも第二次世界大戦も正確に当てている。それなのにノストラダムスを含め代々のユダヤ予言者達が一致していたはずの最高位の予言は当らなかつた。何故なのか。それは神の「計画」だからではないか。

一九九九年七月の破局に向かつて時間は間断なく進む。その間に起る種々様々な事件は全て神の予定の中にある。この場合時間は過去、現在さらに未来へと一直線に進行するだ

けである。

未来の特定の時間に特定の出来事が必ず生起する。これが神の意志であり計画のプログラムなのである。

これは夢通信技術を習得し平和を享受した人々の世界では通用しない。夢通信世界では事件は時事刻々と変容しそれがどう収束するかは誰にもわからない。しかし地球医療効果を確信する人々にとつて結局世界は平穩となる。これは長い経験が教えてくれる。夢通信による地球医療も神にゆだねるのではない。人々の普段の努力を準備があればこそ天災克服も成功するのである。神は一人かもしれない。しかしそれは何事かを人々に強制する存在ではない。一神がたとえば針に宿る微小神にまで無限に分割され記号化される日本の神が針を通してそれを使う人に幸福をもたらす。神と人とはそんな関係なのだ。世界に限なく張り巡らされた夢通信網の交点にはそんな神々が宿っている。勿論針に宿る神よりは圧倒的に強力には違いない。それでも

交点は数万はあろう。ということは数万の神々が人々の幸福を願つていふということである。

この数万の神は唯一神の分割神ではあつても唯一神に支配されているわけではない。孫悟空の無数の分身と同様この神々は唯一神の分身であり唯一神の意志は体現しても分割された分の力しか持ち合わせない。

各交点のシャーマンが交信し合つてこそ、そこに宿る神々が合力して強力になるにすぎない。ただ夢通信網が機能しなくなつて世界はどうなつたのか。

夢通信網は天災克服の装置であり火金土木水の五行と地震や台風等の天災すなわち地球の病気が対応するがこれが機能を果たさなくなるに於て人間は自分たちの力を信じるようになった。

特に中国と西ヨーロッパにそれが顕著であつた。B C一〇〇〇年以降のことである。

## 「計画」組織はない

中国は治山治水に成功し巨大王国を成立させた。要は夢通信網にたよらずに人力で天災を克服できると信じたのである。ピークは秦漢時代、B C二〇〇年から万里の長城造営や何千キロにもなる黄河から長江までの大運河開削をした時期である。周時代以後の治山治水は黄河、長江などの大河の洪水を防ぐために行われ農耕に関わる善政の象徴だったがそれによつて土木技術が長足の進歩をとげた。

秦の始皇帝や漢の皇帝たちはそれを自分の権力拡張のために使用した。万里の長城は外敵の侵攻を防ぐためとはいえ明らかに軍事目的だし大運河は皇帝の行幸が行われ易くし支配を強固にするためであつた。

それでも中国では漢方医学、易占、



風水術などのアトランティス科学を  
残存させおおいに活用したからまだ  
いい。

西ヨーロッパではキリストが誕生  
した頃からローマ帝国が強大となり  
ここでも土木技術が驚くほどの発達  
をみせた。勿論それはローマ皇帝の  
首都ローマや貴族たちの支配地の都  
市を壮大に劇的に構成するための技  
術であった。山を削り河の流れを変  
えてまで宮殿をつくり自然風景を徹  
底的に人工化していった。

ここではアトランティス科学全く  
忘れられていった。徹底的に人力の  
優越を過信したはずのローマ帝国は  
どういふわけかキリスト教を受容し  
国教としてしまった。ローマ帝国は  
ヨーロッパ全土を支配下にするほど  
の広大な国土、キリスト教はヨーロ  
ッパ全土を席卷したのはいうまでも  
ない。

中国はアトランティス科学、すな  
わちアトランティス夢文明を残存さ  
せたから人力過信にも常に反省が求  
められた。道教、仏教が人力過信を

抑制する役割を担った。

これに反してヨーロッパ、特に西  
ヨーロッパは夢から覚醒したといえ  
ばきこえがいいが余りに現実重視に  
かたむいたため人間存在が頼りなく  
感じたためである。唯一絶対の超  
越神に自分たちの運命をまるとゆ  
だねてしまった。

しかしこの神はねたみ深い。果た  
してかつての異教徒を本当に受け入  
れるであろうか。

終末戦争の末に再臨するキリスト。  
これに救われる選民となれるかどう  
か。ヨーロッパの人々は深刻な問題  
を抱えたといえる。

ルネッサンス以降超越神から徐々  
に自由となり一九世紀の産業革命に  
よつてえた高度科学技術文明とそれ  
以後の驚異の発展で人間は何でもで  
きる、ことと次第によつては宇宙す  
ら改変できると信じはじめた。ここ  
二〇〇年で一擲に超越神の束縛から  
解放されたとみえる。

しかし二〇〇〇年に及ぶトラウマ  
はそう簡単には消えないらしい。

グラハム・ハンコック『天の鏡』

(大地舞訳・翔泳社) はエジプト・  
ギザの三大ピラミッドとスフィンク  
スがみせるオリオン・ミステリーに  
加えカンボジアのアンコールワット  
などの七二の建築群がBC一〇五〇  
〇年の竜座の状態を地上に写しとつ  
ているとする。ギザでは一〇五〇〇  
年の獅子座とオリオン三星だった。  
ギザとアンコールでは経度七二度の  
差でありこの七二度に意味があると  
のこと。それはそうだろう。経度七

二度分は地球結晶正一二面体による  
分割線を示しているからである。だ  
からアンコールを通る経線は夢通信  
にとつて重要なのである。それはと  
もあれBC一〇五〇〇年は二〇〇〇  
年からすれば一二五〇〇年で地球の  
地軸の回転、歳差運動一周期二五〇  
〇〇年の半分でありBC一〇五〇〇  
年当時の人々が歳差運動のことを熟  
知して後世に何らかのメッセー  
ジを残したのではないか。

ギザはBC二五〇〇年、アンコー  
ルはAD一一五〇年に建造されてい

る。大きく時代を隔て同じBC一〇  
五〇〇年時の夜の天空を地上に写し  
だした理由は何なのか。

失われた霊的文明。どうもアトラ  
ンティスのことらしい。その文明が  
後世の人々に地球の危機か何かの重  
大なメッセージを残している証拠で  
ありかつそれを伝える組織が現代で  
もあり人々の眼からは隠されている。  
これがハンコックのいいたいこと  
らしい。

危機に際して救うべき人々がいる。  
これはこの組織の目的であると明言  
している。

彼は予言者。まるでキリストを含  
めた「聖書」の予言者を思わせる。  
この本は一九九九年以前に書かれて  
いるからノストラダムス予言の補強  
をねらっていたのかもしれない。た  
だし正当派キリスト教とは逆立場の  
グノーシス文書を引用したりしてい  
るから自分は「聖書」すら超越して  
いるといたげではある。

しかしノストラダムスの予言は当  
らなかった。多分ハンコックの思わ

せ振り予言も当ってはいまい。それでもギザとアンコールに対する発見は消えるわけではない。

間違いなくアトランティス夢文明を伝えた人々、私のいうアトランティス遺民は存在した。

ハンコックの指摘通りAD二一五〇年のカンボジア王はその一人だった。

しかし彼は組織の一員などではありえない。彼はBC一〇五〇〇年時代にもどることができたのだ。それは多分アトランティス文明の最盛期だった。それから一〇〇〇年してアトランティス島は海没してしまった。カンボジア王はまさに人類の黄金時代を追想したのである。

人類はどこまで存在し続けられるのかはわからない。しかし危機を迎えたらアトランティスの夢文明にもどればいい。これを伝えるのがアトランティス遺民の使命である。しかしそれは選民ではない。私でありあなた、誰でもアトランティス遺民なのである。ただ異常なほどの夢能力

にすぐれている必要がある。これも訓練によって習得できる。

アトランティスの人々の時間は循環したり枝別れるものだった。現代物理学でようやく発見した「時間」を彼らは日常感覚で十全に受容していた。時間は過去、現在、未来と一直線でないことぐらい熟知していたのである。だから夢の中で一二五〇〇年の未来にタイムスリップすることもできた。

同じ能力でも「聖書」の予言者は核戦争の現場にしか立ち会えなかったに違いない。ねたみの神ヤハウエがそうなのだ。それで不信心者を恐怖に陥れてしまった。誠もって哀れ。

了

最終回